

第10回多摩市総合計画審議会 議事要点録

1. 日時：平成21年10月5日(月曜)午後6時30分～9時
2. 場所：市役所 301・302 会議室
3. 出席委員：13名
4. 欠席委員：上野副会長 今川委員
5. 議題

(1) 第8回審議会議事要点録等の確認

事務局 第8回審議会の議事要点録については事前に各委員に確認頂きご指摘いただいた点は修正した。本会議で承認後、行政資料室及び公式ホームページで公開する。

会長 特に追加修正はないため第8回議事要点録は了承とする。

(2) 資料37・38の説明について

事務局 資料37については、前回の審議会で各委員に提案いただいた基本構想の主要な内容(キーワード等)を基に事務局で4つのパターンで柱立てしたもの。資料38は各委員に提案いただいたキャッチフレーズ、キャッチコピーをまとめたもの。また参考資料として総合計画審議会の分科会メンバーについての案をお示しした。

(3) 市民との意見交換会について

会長 市民との意見交換会の相手について、前回の審議会で商工会議所関係者、国際交流関係者、コミセン運営協議会運営委員、自治連合会役員等から推薦したらどうかという案があった。

委員 子育てをしている方の生の声を聴きたい。

会長 商工会議所の関係者、国際交流の関係者、子育て世代、自治会関係者から、候補者を事務局であげてほしい。

事務局 了解した。市民との意見交換の日程は相手側と調整のうえ決めさせていただく。

(4) 基本構想の構成と主要内容、分科会について

会長 前回提案いただいた各委員の案と今回事務局でまとめた資料を基に基本構想の構成について、大まかな柱立てを審議したい。基本構想は若い人から高齢の方にまで読んでもらうことと、市の行政の方向付けを行うものであることを念頭において議論いただきたい。もう一つ、今日決めるわけではないが、皆さんから出していただいた基本構想のキャッチフレーズ、キャッチコピーを一覧表にしてあるので見ておいてほしい。

委員 2本柱は基本構想から基本計画に繋がる形としては難しい。ある程度わかりやすく、全ての分野を関連付けられるスタイルとして3本柱が良いのではないかと。5本柱、7本柱はどのまちでもありそうな形で包括的な話になるので、「多摩市らしさ」を1つに絞って、3つのキーワードでまとめるスタイルが良いのではないかと。2本柱は総合計画とは違うところで使うやり方があると思う。

会長 この案のなかのどれかを選ぶというのではなく、あくまで案として議論して収斂すれば良い。目安として何本くらいというスタイルを決め、その後中身を決める。修正すること

を前提に考えてほしい。

委員 なじみやすいのは 5 本柱の案。都市像から目指すまちの姿のイメージがわかりやすい。7 本柱だと煩雑になるように思う。広い分野を網羅しながらポイントがわかりやすいのは 5 本柱だと思う。

会長 個人の好みや感覚による部分もあるかもしれない。理論的に何本が良いと決められるものでもないので、感覚が良い。

委員 基本構想は今後 20 年間ローリング（改訂）しないのか。基本計画の更新期間は何年か。

事務局 基本構想は基本的には変わらない。状況が著しく変われば変更する可能性もある。基本計画は、向こう 10 年を見据え、4 年ごとに変更する。

委員 基本構想自体に具体的な事業をイメージするようなものを入れてしまうと 20 年間の構想期間に耐えられなくなる。基本構想はシンプルにしたほうが良い。

事務局 市民の目線で作るビジョンに純化していくというのが策定方針の考え方である。

会長 基本計画が基本構想にぶら下がるイメージ。基本構想と基本計画をつなげていくことも考えなくてはならない。

委員 これまでは行政評価が曖昧な運用がされてきた。今後は評価のベクトルを定めた客観的な評価が求められる。そのときの評価の拠り所になるのが、政策の母体である総合計画であり、基本構想までさかのぼることはないと思うが、基本構想と基本計画の関係は必ずや問題になる。基本構想では行政の評価基準を拘束しない形にしないと、今後環境変化は訪れるし、20 年間に渡る基本構想には個々の政策に影響を与えるものは書かないほうがよい。基本計画の部分で具体性のあることを書いていく。評価の基準を示す総合計画において、基本構想では評価の基準となる理念を示すことに特化すればよい。

会長 現行の総合計画では施策に入り込んでいる気がする。理念的なものにしたほうが良い。施策の大綱は市が施策を実施する時に決めればよいものだ。今回の基本構想では細かいところまでは踏み込まないようにする。

委員 以前配布された参考資料で那覇市の基本構想がわかりやすいので参考にしようか。柱立ては基本計画を何本柱にするかという視点をもって考えて、それを理念化するものが基本構想ととらえればよい。何本柱にするかは、方向性が同じものを同じ柱にくくるようにすれば、結果、何本柱になるか決められる。

会長 那覇市は表に出ている部分は簡潔なものになっているが、中身は 6 本の柱で詳しく書いてある。

委員 3 本柱だと簡潔でわかりやすいが、20 年間に渡る構想という視点で問題点を整理すると、5 本柱がわかりやすく問題点も網羅できる。

委員 いくつにくくれるかという問題。どういうくくり方をすればわかりやすいか。数にこだわらないほうが良いと思う。10 も 20 もあるのでは困るが、くくりやすく、わかりやすくすることが大切だ。

会長 今すぐに決めなければいけないわけではないが、漏れがないようにする必要はある。

委員 安定するのは 3 本柱か 5 本柱。細分化するほど矛盾が出てくる。バランス良く配置できて漏れなく出来そうなものは、昔から 3 本柱か 5 本柱で、行政プログラムを想定すると 5 本柱くらいか。最終的に精査して 3 本柱になるのはよいが最初から 3 本柱にしてしまうとくくりにくい。

会長 2 本柱では少なすぎて 7 本柱では多すぎるという意見が多いようだ。3 本柱に押し込むと

ということではないが、整理のしやすさを考えていただければよい。

委員 好みもあるが、見て読んだときに 5 本柱のほうが、内容がすっと落ちてくる。3 本柱よりも 5 本柱のほうがわかりやすい。20 年後をイメージするビジョンなので、多くの方に読んでもらいたい。誰が読んでもわかりやすいことが大事だ。

委員 今後の進め方として、柱立てに沿って分科会の構成も決めるのか。分科会に一旦分かれて審議するわけだし、あまり細かくても分科会の体をなさない。分科会のメンバーに振り分けることも視野に入れ、なおかつお互いの分野に目配りができるということであると 5 本柱か 3 本柱がいいのではないか。

会長 分科会については検討しなければいけないが、担当する分野だけ検討するのではなく、全体を検討していただく面と重点を置いて検討いただく分野があると考えている。

委員 提案だが、代表する分野（柱）を上げてみてはどうか。例えば、福祉という分野に健康や子育てが入るのかどうか。いくつ代表的なものがあるのか考えていったほうが良い。何も考えずに 3 本だとか 5 本だとか言ってもまとまらない。

会長 18 ある分野をいくつに分けられるか。

委員 多摩市としてどうくるのかを先に決めてはどうか。健康と医療を分ける自治体はないだろうが、福祉と一緒にするかは考え方により違う。

会長 非常に大きく分けると子育て・健康・医療・福祉でひとつの柱になる。子育てを強調して 1 つのグループにするということはある。

委員 福祉なら福祉で細分化する案もある。民生費自体も額が大きい。

会長 資料 37 の分野種別で、4 の学校教育と 5 の生涯学習は一緒になるか。それと 12 の文化もくくれる。生涯学習には市民生活の面と教育の面があり、それは考え方による。きっちり垣根は作れないので大まかに作ればよいだろう。例えば交通を取ってみても市民生活とまちづくりの両面にわたる。中身によってはっきりと分けられないところがある。

会長 ハード面の整備では 14 の都市づくりと 15 の住宅がひとつのグループになるか。17 の観光と 16 の産業振興でひとつのグループになる。それから 7 市民生活と 8 コミュニティ、9 防犯で一つ。観光をどう扱うのか。みどりについては環境に入るのか。

委員 今後、10 年間で嫌というほど環境対策の事業は国から降りてくる。市として仕事のひとつの柱となることは間違いない。ただ、国の施策と市の方向性をどうすり合わせていくのか。

会長 国の政策がどう変わろうと市民の立場からは変わらないという部分しか書けない。市レベルでは、CO₂ を 25%削減するとは言えないし、市レベルで考えられるのは、廃棄物を減らす、みどりをまもるとか、自然を残すということになるのではないか。事業レベルでは自動車を使わずに自転車に乗ることを推進するとかいったことだ。

委員 環境は一つの領域というよりは、既存の様々な事業や生活を、環境の観点から見直すということになると思う。環境の領域というものがあるのではなく、環境の観点から基本構想を作っていくということになるのではないか。同じ様に、福祉の観点からのまちづくりもあるだろうし、そのあたりにうまく反映できればよい。縦割りの領域とは違う。環境の視点で交通システムを見直すとか、産業の在り方を見直すという考え方で、福祉なども同じように考えられるのではないか。その辺りが示せるとよい。また、市民農園を含め農業について議論されていたが、農業はどこに入るのか。産業か。

会長 みどりは観光資源でもあり、産業振興でもあり、環境でもある。子育てにも関連する。

あまり厳密に仕分けするのではなく、便宜的に柱にわけて組み立ててみるということ。環境は全体にかかわるものだが、一つの柱として、事業ではなく考え方はこうだという方向性を示すことはできると思う。

委員 分野種別の中には農業にかかわる部分を入れておきたい。今後の日本の在り方を考えた時に、職業のこと、生活のこと、みどりも含めて、都市における農業の在り方を項目として入れても良いのではないか。また交流ということがどこまで入るのかということでは、今抱えている問題を考えると国際化、いろいろな人が多摩市に住んでいる状況があるので、項目としてあったほうが良いのではないか。

会長 分野種別の交流は、国際交流のことなのか、市民の往来も考えているのか。

事務局 今は戦略プランの切り口でやっているので、国際交流も含まれていれば地域間交流も含まれているし、小さなところでは家族の交流ということまで含まれる。

会長 前回、多様性・賑わいという言葉があったが、それがここに含まれるのではないか。

委員 先日見たニュータウンの映画に、今後、外国人の方がニュータウンに入ってくるだろうという場面があり、そのとおりだと思った。今よりも20年後を考えた時に、生活の在り方ということが今後大きな課題になっていくことを見据えていったほうが良い。

会長 農業が大事であるという議論がされてきたが、多摩市の農業は非常に微々たるものである。それを保存するか、拡大することはできるのか。

委員 農業の拡大については、農地の拡大が都市の中では難しいため、農地を減らさないように、かなりの区市町村で都市の農地の保存という施策を展開している。東京都も、以前は都市に農地はいらぬという方向性だったが、都市の農業の重要性を最近では言ってくるようになってきている。そういう意味ではここでしっかりやっておかないと、20年たった時には下手をすると多摩市から農地が無くなってしまう。

会長 農業は産業振興になるのか。

委員 基本的には産業振興であるし、付随してみどり、防災面とも関連している。

会長 そういう触れかたでいいのではないか。農業は産業にも入るし、みどりの保存にも必要だというような方向で載せればいだろう。分野種別に農業は入ってないが、どこかで触れるということではどうか。

委員 やはり言葉としては出していきたい。

委員 柱の数を何本にするかの分岐点は福祉の分野をどうするかによる。子育て・子育てのような主なターゲットを乳幼児、若年層に置く施策と、これから急速に高齢化が進んでいく中で高齢層にターゲットを置く施策とを分けるか、分けないかで、柱の数の多少が決まる。福祉として大きくくくってしまえば1つの柱になるし、多摩市は高齢者も子育て・子育て施策もやると、明確に構想の中で2本の柱を別個に立てるならば、それによって柱の数は変わってくる。そこをまず議論してはどうか。

会長 今まで分野別の議論の中では、医療・福祉の中に子どもも高齢者も障がい者もすべて入れてきた。そういう分け方もあるし、子どもに重点を置きたいということで子育てを柱とすることもありうる。

委員 高齢者と子どもをわけたらそれだけで柱が2本になり、必然的に3本ということはない。その他を全てくくることはできないので、そうすると5本、6本となる。

会長 比較的関連するものを大まかにくくって、議論を進めて最終的にもっとくくるとか、分けたほうが良いとの結論になればそれに従えばいいので、初めから柱の数を決めなくても

いい。

委員 柱を決めるという考え方ではなく、全てを包含するキャッチコピーを考えようという視点の宿題だったのでそう考えた。環境の話であったように、もう一つ上の全部を包含するところに、フィードバックしながら考えていったほうが良い。基本理念のところに環境や審議会でも重要視している子育てを入れていくなど、柱のことに基本理念を常に考えながら、この中で一番大事なことは何かを考えていってはどうか。

会長 基本理念の中には「子どもの声が聞こえる」とか、「賑わい」や「環境」を言葉として入れておくという考えが一つある。その上で、今後のめざすまちの姿とするものを5つか6つに分類して比較的漏れが無いように盛り込んでいく。上位には、みどりや子ども、環境が入ってくる。理念と柱の両方に入るものとする。健康と医療は分けないとしても、子育てを福祉から分けるかどうかはもう少し細部を詰めてからでいいだろう。子育てを特に独立したほうが良いということであれば、そのときに独立させることにして、今、分けることはない。

委員 分科会のくくりを福祉でくくると大きくなってしまふ。とりあえず「子育て」を柱の福祉・医療と、「高齢者」を柱とした福祉の在り方やまちづくりの在り方で分けていく。高齢者福祉を考えると、高齢者向けの住宅をどうするのかなど、まちづくりも関連してくる。そのほか産業振興などのその他のもので3つのグループになるのではないかな。

委員 分野種別は、戦略プランをベースにしてキーワードを出しているので、施策・事業の分野で落ちの無いようにしていると思う。福祉に医療も含まれるが、施策の中では分かれて推進している。この辺りは、どちらが良いかは論議が尽きないところである。

会長 決め方の問題だ。全部が関連していると言えば関連している。あまり狭く考えずに、自分の領域と人の領域を分けなくて考えてほしい。ただし、分科会については、便宜的にわけて議論する方向にさせていただく。参考資料でお配りしたたたき台案1は5本柱+基本姿勢となっているが、これを2つずつにくくと3つのグループができる。分科会では、割り振られた分野だけでなく、その分野を主としてやってもらうがすべてが関連しあっているから、ほかの分野のことも議論してほしい。

会長 前回、副会長からカードを使って項目を整理し、後で持ち寄ってまとめる手法の提案があった。お手元にカードを配っているが、分科会の意見をまとめる時、項目や重複するものを整理する時や頭の整理に使ってほしい。委員の専門分野等を考慮し6つの分野に分けたが、これでやってみてもっとまとまるのであれば3つ4つの分野にまとめ、分けたほうが良ければ6つ7つの分野に分けるということで議論をお願いします。

委員 分科会では何を議論するのがイメージできない。

会長 審議会そのものもそうだが、分科会は基本構想に載せるべき望ましいまちの姿を議論してほしい。5つにするとか3つにするとか議論しているのは、将来のまちの姿としてこうあってほしいと思うものの柱立てである。柱立ての中に取り込むべきものを分科会で審議してほしい。これまでの審議会でも、「子どもの笑顔」や「賑わいがある」とか「いのちが輝くまち」などキャッチフレーズのようなものもあったが、細部の事業に渡らないおおまかな方向性としてこれはぜひ盛り込んでほしいというものを盛り込む。農業はぜひ残すべきだとか、みどりはもっと増やすべきだとか、短いフレーズでよいのでたくさん出して、そのうえで選択すればよい。福祉であれば「年をとっても健康で長生きができる医療体制を作る」とかその程度。特別養護老人ホームを作るとかのレベルは施策になる。文化でい

例えば、「子どもの能力を伸ばせる学校教育」だとかありふれたものになってしまうかもしれないが、色々考えて出していただきたい。

委員 グループ分けを見ると、1つ目のグループが議論しなければならないことが他より重い気がする。子育て・子育てや福祉等、多摩市の歳出予算を見てもかなりのウェイトを占めている部分が入っていて、この下にぶら下がる事業もものすごい数がある。くくり方として子育て・子育てを学校教育のほうに置いて、バランスをとったほうが良い。そうすると、2つ目のグループと3つ目のグループでもバランスをとったほうがよいだろう。防犯・防災は別のグループに分けても良いのではないか。

会長 防犯・防災を2グループへ分けたらどうか。福祉分野では、大きな部分が子育てになる。福祉から子育てをとると、高齢福祉、障害福祉になってしまう。

委員 福祉のウェイトが大きいので、子育ては切り離してはどうかということ。少なくとも防犯・防災は切り離せる。

会長 防犯・防災を2つ目のグループに移すこととする。

委員 委員の人数も4~6人とか3~7人とか流動的でも良い。1つのグループで5人ということにこだわらず、委員が何を中心に議論したいかという意見を反映したほうが良い。

会長 たたき台案1を基本に分科会をつくる。再三申し上げているが、あくまでも分科会は全体を見ながらグループの担当分野を重点的に議論して欲しい。子育て・子育てをみても、健康・福祉に関係があるが学校教育、生涯学習にも関係があり、文化、観光、交流とも関係がある。交流は外国人との交流も含むと考えると、すべての世代に関係がある。あるいは産業振興にも関係があるかもしれない。いろいろ多岐にわたって関係するので分野を意識しすぎず、広い視野で議論して欲しい。

委員 分科会でまとめるべきことは何か。柱立てなのか、柱に入れるべき内容なのか。

会長 両方あるが、柱立てというよりは柱に盛り込むべき内容を検討するのが分科会になる。例えば、農業は残すべきだとかみどりを増やすべきだとかそういう話になる。

委員 それだと基本的にボトムアップをしていくのと一緒に包含を目指す形になる。落ちが無いように全ての事業を拾いだしなければいけないので結構しんどくなる。もう少し自由な市民の目線で、こんなまちになって欲しいということをごんごん出して、分科会で取りまとめれば良い。個別の事業は後でどうにでもなるので、こんなまちになってほしいということをごんごん議論する。80歳になっても元気に散歩できるまちにしたいなどだ。

会長 そういうことでよい。細かい事業レベルの議論はさけて、大きな理念とその下くらいで、少し具体的ではあるけれども方向を示すということ。強調すべきものを考えるので、漏れるものがあるのは仕方がない。例えば、交通は非常に大事だから入れようとか、逆に、特に強調する必要がなければ落とすとしてもよい。細かいところに気を取られて網羅的にやる必要はない。

委員 最後に落ちてしまうということはない。市がやっている事業なので、この下にぶら下がらなければならないが、事業を押し込むのは最後でよいので、最初から押し込むことは考えなくてよい。理念を議論するときには考えなくても良い。

委員 こんなまちになってほしいということをごんごん議論するなら、分野を分ける意味があるのか。大人数での議論がしにくいということであれば、分野ごとに分けて、ただグループに分けて、それぞれがどういうまちになってほしいかというのを出しあい、分科会毎に集約したものを全体でもう一度集約すれば、何を共通の事項とすべきかが見え

てくるのではないか。分野に分けて議論をしていくと、その中で議論することを考えてどうしても網羅的になっていってしまうと思う。

会長 両面がある。15人では話しにくいが少人数ならばもっといろいろな意見がでるのではないかというのが一つ。グループに分けて、みんなが同じことをやるというのも不経済な気もするので、共通の問題意識を持ちながら、主として重点を持つ分野を決めておきたいということ。みんなが全部をみるというのは時間が足りない気がする。

事務局 今後、分科会で出たことをどう活用するかを考えていただきたい。分科会で出たことを審議会全体で議論し、それを起草委員会が文章化する。起草委員会では起草案に盛り込みたいキーワード等を受けて文章化する。例えば5本柱ならば5つの箱の中に盛り込みたい項目やこんなまちになってほしいという意見がある程度集約して、組み合わせて文章化する。そのためのヒントを検討していただくのが分科会のイメージだ。

会長 分科会も審議の一つのやり方で、分科会後にまた審議会をやり、さらに大体の骨子が固まった段階で起草委員会のようなものに案文の作成をお願いするという、二重三重の手順を踏んでいきたいと考えている。比較的分科会では自由に議論したいが、全体の審議も後半に入っているので重点分野を絞って議論して欲しい。

委員 今後の作業を考えると、入れる柱や箱が明確に定義されていれば、起草の文章はおのずと出てくる。分科会に分かれて議論していく中で全体の柱だてをどうするかというところまで分科会で出す。柱立ての案をまず出して、全体会でまとめて箱を作れば文章は後からついてくる。理念的に作るのであれば箱を作ったほうがいい。

会長 仮置きではあるが5つの柱に分け、分科会の議論を受けて全体で柱を決める。

委員 できれば柱の見出しまで分科会の作業目標とする。分科会の作業目標として何をすべきかがはっきりする。分科会ごとに1つ、全部で3つの案を出してはどうか。その後それぞれのメインの分野をくっつける形でもいい。

会長 分科会では大きな柱とその見出しを決めることにする。グループ分けはするが、広い分野で意見をかわし、事業レベルまでは踏み込まない。次回の会議は分科会での審議をお願いしたい。進行はそれぞれのグループにお任せする。

委員 分科会の日程はいつで、次の全体会はいつになるのか。また、分科会に分かれて議論をするが、全体会に出す資料作成は事務局をお願いするというでいいか。

事務局 次回、第11回10月14日を分科会とする。今のところ分科会はこの1回の予定。19日と28日の審議会でも分科会の検討結果を持ち寄り、骨格を決定していく予定である。また、各分科会には職員が入る。検討結果をそこでまとめられれば、3分科会分をまとめて次の審議会に提出するようにしたい。

会長 分科会の審議では、カードでグループの意見を整理してもらえれば、事務局はそれを基にまとめられると思う。カードは使用しなくてもよい。本当はグループで書記がいたほうが良いがそれは事務局で担当する。3分科会の案を整理して19日には出す。1回で審議が終わらない場合は適宜分科会の回数を増やす。これは分科会で自主的に決める。やってみないとわからないところもあるが分科会での活発な議論を期待する。本日は進め方だけで内容をあまり審議しなかった。どのように柱立てをするかは分科会の結論待ちとする。基本構想の性格は当初、新しい立場で新しいものを作るものだと思っていたが、改訂ではないにしても事業は継続しているので、単に新しいものを作ればいいわけではない。過去の総合計画や戦略プランとの継続性を強調することはないが、目新しいものだけではなく、

今までの審議会の議論の延長線上で議論して欲しい。今までになかった発想で新しいものを作ろうとする必要はない。どこの基本構想を見てもそれほどまちの姿が変わるものでもない気がする。また、多摩市はベッドタウンとしての性格を強調したほうが良いのか、働きに出て行く人のことは気にせずに残っている子どもとお年寄りのことだけ考えればよいのか、その点は考えものだと思う。まちづくりを考えるときに、都心などに通勤している生産年齢の人たちのことを考えていない。その点をどのように扱うのかがいまだによくわからないがどうか。それは市の基本構想ではなく東京都の構想で考えることなのか。

委員 イベントやコミュニティづくりを考えるときに、お子さんとその親御さん、高齢者はボランティアでもイベントでもコミュニティの場でもたくさん集まるが、働き盛りはそういう場に顔が出てこない方たちだ。勤労者のニーズを満たすという視点も重要だとは思いますが、コミュニティを考えていくとそういう方のイメージは希薄になってくるかもしれない。そういう方たちの汲み上げられていない要望があるならば、考えていかなければならない。しかし、やはりイメージとしてはコミュニティ活動に参加している、子どもたち、弱者、女性、高齢者、そういう方のイメージがわいてくる。

委員 コミュニティセンターの活動ではこれまでにいろいろな仕組みを変えてきた。児童館と一緒にやったお祭りでは、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、いろんな世代が交流する賑わいのあるイベントになった。その地域だけかもしれないが、サラリーマンの人や市内で活動するサイクリストなど地域の方でない人たちが参加して、仲良しクラブ的なものではない、多様な人が参加できるイベントになった。

委員 土日だからかもしれないが、お父さんが来てくれたりしていた。ボランティアで多摩市内の地区ごとの地図を販売したが、お父さん世代が健康のために買ってくれた。多摩市での活動が見えて楽しかった。

委員 今お話にあった地図はコミュニティセンターのまちづくり委員会で、まちの宝物マップとして10種類くらい5年ぐらいかけて作ったものだ。2時間くらいで行けるコースだが、延長してサイクリングコースマップも作っている。そういった活動を軸に色々な活動を地域で展開している。

委員 ニュータウン入居から40年がたち、その頃と今ではずいぶん求められるものが変わってきている。当時は若い世代と小さな子どもを持った世代が多く通勤や学校教育が大問題だったと思うが、今は団塊の世代が地域に戻ってきて、コミュニティ作りに参加している。そういう意味で基本構想も最初のころと今とではかなり変わってくると思う。人口構図が当時とは全然違ってきている。

会長 昼間いない人は仕方がないという話になってくるのだろう。ただし外で働く人が安心して働くためには、地域がしっかりしていなければいけないということで、ではどうするかという話になり、例えば子育てなどがその最たるものになる。どこの基本構想を見てもそうだが、基本構想には地域の特性が出る。横浜などは仕事もできるし生活もできる。地方の中小都市もそうだが、多摩市はどちらかというとベッドタウンなのでそういう発想が少ない気がする。安心して都心に通勤できるためにはどうするかということだ。

委員 安心して夜道を歩ける。土日にまちを歩けば、笑顔があふれている。そういった明るい地域社会を作っていけるかどうかは、昼間多摩市に残っている子育て世代、中高年世代が地域をどう作っていくかにかかってくると思う。納税者である労働者が、安心して生活できるまちというのを実感できればいい。また、1人暮らしをしていた人が、結婚して多摩

市で子育てするとき、子育てしやすいまちになっている。小中学校に子どもが入学したときにも、子どもたちの教育環境が豊かになっている。そうしたいろいろなサポートがあれば、税金だけを納めているというのではなく、地域の恩恵も感じられるのではないか。防犯、防災は地域の支えあいの部分がとても大きいので、このところだけでも通勤して昼間はいない市民にも、安心が感じられる面が多いのではないか。

会長 防災の一つは住宅や橋、道路が安全であるということと、もう一つは犯罪の防止で見守りをするとか、コミュニティでそういった活動をするとかいろいろな分野にまたがる。そのような観点で広がりを持ってご意見をいただければと思う。

委員 前回の審議で、多様性を言い換えた「いのちの賑わい」というキーワードが出され、すごく良い言葉だと思ったが、資料38のキャッチフレーズの中から抜けているので加えてほしい。

会長 キャッチフレーズもどんどん新しいものを提案していただき、この審議会の終盤に決めていくことになると思う。一人でいくつか案を出して投票で決めてもいい。

委員 一人が2つ、3つ案を出し、最後に決まる時まで誰の案かは伏せておき、オリンピックのように投票して最後に一番良いのが決まるという流れもいい。

会長 キャッチフレーズやキャッチコピーは、今出ているものは整理してあるが、新しいものをどんどん提案してほしい。「子育てしやすい日本一のまち」のように数値目標を出しても良い。以前、事務局からの説明にあったが、健康な高齢者というか、長寿で健康な人が多いということもあったので日本一を目指してはどうか。20年後だからめざすのは構わないと思う。そういう数値目標があったほうがいいような気がする。

委員 多摩市の将来にとって、高齢者の人口動態にポイントがあるような気がする。多摩市のような高度に市街化されたところでは土地がなく、市街化調整区域が無いので、高齢者用のグループホームや特別養護老人ホーム等の整備が難しい。入居を希望する高齢者は数多くいると思うが、多摩市内ではなく近隣市に施設が建設されていくと、そうした高齢者の自然流出が起こるかもしれない。そうすると、健康な高齢者日本一というキャッチコピーがネガティブなものとして受け止められ、健康でない人は多摩市から出て行けと、捉える人もでてくるかもしれない。

会長 いろいろな見方があるかもしれないが、多摩市にいれば健康で長寿でいられるととるか、施設入居者は外に出て元気な人だけ残っているという話になるか。

委員 他市の基本構想をみるとキャッチコピーの有無の差がある。キャッチコピーがある場合も扱い方が様々だ。表紙に書いているところと、将来都市像として文章の中で表現しているところの2種類がある。様々な考えがあるだろうが、個人的には表紙にキャッチコピーがあったほうが手取りやすく、読みやすいように感じる。

会長 キャッチコピーは作る方向で議論してほしい。最終的に本文の中に入っていれば良いという議論になればそれはそれで良い。一言で言えばこういうまちだと言うのがあれば、共感を得やすいので、そういう前提で検討していく。キャッチコピーは、市民との意見交換会の前に決めるのもどうかと思うので、市民との意見交換会が終わった後で最終的に決める。キャッチコピーはなかなか決まらないと思うが、なるべくたくさん出していただいて、良いものに決めたい。一番頭にくるものが、最後に決まるというわけにもいかないので、少なくとも最終の前くらいには決める。起草委員会では本当はキャッチコピーを踏まえて書かないと文章化しにくい面もあるので、進行状況に応じてご相談

させていただく。

(5) その他

委員 基本構想、基本計画はまちごとの特色を出せたらよい。多摩市にとってはベッドタウンというのは非常に大きいと思う。今回、那覇市のものを見ると「亜熱帯庭園都市」と那覇らしい特徴がありインパクトがある。どこのまちでも同じようなものを作ってもインパクトがないし、自分たちのものという気がしない。多摩「らしさ」を出すことが非常に重要で、「これは多摩のものだ」ということが入っていて欲しい。何が良いかは今後議論したいが、大学の授業の時にはスタジオジブリのアニメを使っている。一つは「平成狸合戦ポンポコ」で、長池公園もこのアニメをイメージしていたり、ニュータウンがモデルだと言うと学生が引き込まれたりする。もうひとつは「耳をすませば」というアニメで、聖蹟桜ヶ丘がモデルで駅前にそのマップがあつたりしてイメージを喚起させる。また、学生を雑木林に連れて行くと、「トトロの森」だと感想を言う。そういうイメージ作りは学生相手だからというのもあるが、委員の皆さんは多摩「らしさ」をどう思うか。多摩市のイメージはどんなものか。

委員 多摩市には、サンリオピューロランドがあるので、キティちゃんのイメージがある。
委員 ピューロランドがあるまちとして、キティはひとつのシンボルではある。こういったものを文面に入れるということではないが、多摩のまちがどういうまちなのかというところは出したい。

会長 多摩のユニークさを表すものがあると良い。確かに那覇市のように「亜熱帯」と言われるとイメージがわく。一言で言うと多摩市とは何かということを出していきたい。

委員 歴史が浅い。多摩市というとやはりニュータウンのイメージが強く、新しいまちという感じがする。学生懇談会でも話題になったが、村の頃から考えると長い歴史があるが、我々若い世代にとっては村の時代は実感としてない。教科書や資料館でしか目にしない。

委員 外から見ると、やはり多摩ニュータウン、多摩センターのイメージが強い。聖蹟桜ヶ丘が多摩市であるという意識は、多摩市以外の方には薄いように思う。多摩市イコールニュータウンというイメージがある。

会長 ニュータウンといっても、40年前の多摩ニュータウンは未来に羽ばたくようなイメージが強かったが、今は高齢化や住宅についても老朽化したイメージが強い。ただ、もともと人工的なまちであるし、最初の方の議論でニュータウン地域とそれ以外の地域の融合が今でも課題の一つではないかという話があつた。こういったユニークさを強調しすぎることなく出していてもいいと思う。人工のまち、今は高齢化したまちという印象が強いので多摩ニュータウンを表に出すのはどうかという感じはある。

委員 ニュータウンは全国的なイメージがある。構想のベースにニュータウンを入れすぎると語弊がある。オールドタウンとニュータウンが並立するまち。オールドタウンは多摩センターに埋蔵文化財センターがあるが、この場所には縄文の頃から住んでいる人がいるので、大威張りでおールドタウンとっていい。多摩市は新しいものと古いものが融合しているまちで、両方のまちのイメージをアピールすれば良い。

委員 三多摩や多摩地域の中に多摩市はあるのかと質問されるくらい多摩地域のほうが知名度も高く、多摩市の影は薄い。多摩動物公園や高尾山が近くていいですね、と言う方もいる。「多摩」がついて多摩市以外にある有名なものが多く、誤解がある。郊外に出て行くには

便利なところではある。

会長 ユニークなまちではあるが、一言、あるいは二、三言になかなか集約しづらい。皆さんの知恵をお借りしたい。

委員 他市から聖蹟桜ヶ丘に来る人には、多摩川でのバードウォッチングを楽しむ集団の方はいるが、なかなかここを目指してくる人は少ない。ピューロランドには海外からも多くの来客があるそうなので、大きな目玉になる。

会長 多摩市のイメージで「ピューロランドのあるまち」というわけにもいかないか。浦安は「ディズニーランドのあるまち」だと思うがどこが違うのか。キティがブランドとして確立していればいくらでも使える。多摩市が売り出すべきブランドは何かあるか。

委員 ブランドと言うのではないが、多摩市はもともとの地形がひとつの谷戸を道路整備などで切り開いてできている。横浜などは谷戸がたくさんあり、それら全部が大きなまちとなっているが、多摩は1つの谷戸が1つのまちになっているので、すごくまとまりがあると思う。隣のまちとの境は、全部山の稜線で、あとは川なので、1ヶ所にまとまろうと思えばまとまれるまちだ。高いところに住んでいる人も降りてくれば1ヶ所に集まってしまうという特性がある。行政の境界としては理想的な形になっている。また、ピューロランドの良いところは海外の方が来て、非常に単時間で楽しんで帰れるところだ。ディズニーランドは1日いなければならぬので、海外の方は時間も拘束される。そういう面もあって、多摩市以外の方がどっと来ておみやげ物を買ってどっと帰るという面があるのではないか。

委員 都心から聖蹟桜ヶ丘方面へ来ると、府中までは山や丘が無いが、関戸橋から多摩を見ると、丘陵になっていて春は桜が美しく、秋には紅葉も見られる。新緑やみどりなどさまざまな風景、自然の景観が目に見え込んできて楽しめる。多摩センター方面の京王相模原線では稲城や狛江の豊かな自然があるので、多摩市だけ特別ではないが、聖蹟桜ヶ丘はそういうイメージがある。多摩に来る人は本当に桜の季節は綺麗だと言っている。その辺りが一つの特色かもしれない。

会長 多摩市を都心に通勤しやすく生活しやすいまちとして売り出すやり方はあるか。

委員 日野市に比べると、特急が止まるだけでもずっと便利である。不動産屋さんの広告ではそういうことをキャッチフレーズに売り出している。

会長 東京都の拠点整備では、多摩市は多摩地区の拠点の一つである。業務核都市であるという前提があるが、通勤しやすい生活都市であることが重要な点であると思う。ただ、あまり強調しすぎると独立性がないと言われ、自立できないまちのようなイメージになってしまうかもしれない。

委員 通勤のしやすさで言えば、都心に近い府中市のほうが通勤しやすい。

会長 距離で言えば府中のほうが通勤しやすいが、多摩市は通勤しやすくなおかつ府中よりも生活しやすいまちであるということをアピールする。

委員 坂のまちのイメージがある。坂というと移動しにくいというネガティブなイメージと、風景を楽しめるというポジティブなイメージの両面がある。尾道や長崎などは坂のポジティブなイメージをうまく活用している。尾道では有名な映画があり、高齢の方が坂を昇り降りできるまで何とか生き抜こうと、それができなくなったら老人ホームへ行こうという内容のものがあつたが、坂自体もネガティブに捉えるのではなく、それなりに良いところもある。

会長 坂も観光には良いが、長崎の人に聞くと介護という面からみれば普通の2倍くらい労力

がかかり大変だと聞いた。市の悲願の一つが坂道にエスカレーターをつけることだといっていた。良い面を強調し、マイナス面を少なくすることが必要と思う。

委員 地方の農業振興のお手伝いをしているが、棚田保存の例だと、棚田が綺麗なので残そうとしているが、実際に働いている人は高齢の方で成り立っている。支援事業としていろいろな形が出てきているが、高齢の方たちは坂を何とか登れる時まで生き抜こうというポジティブな考えをもっていて、周りはそれを支援しようとしている。坂もある意味、健康のバロメーターという面もある。坂はネガティブな面もたくさんあるが、ポジティブに捉えることも必要かと思う。

委員 聖蹟桜ヶ丘等では坂を上った先に思いがけない風景がひろがっているところがある。そういった印象的な風景のよいイメージもある。相模原線に乗っていると、稲城くらいから山が見えてくる。稲城でも里山付き住宅と言って売り出してイメージを作っていると思うが、その辺りの雑木林や里山となると多摩地域全体のイメージとなって拡散してしまう。住宅街があって、坂を登ると風景がひらけるというのは、いいイメージだ。

会長 そういうイメージが出る基本構想になると良い。多少誇張しても構わない。そういったことも考えながら検討してほしい。皆さんから出していただいたイメージを反映した構想を作りたい。本日は以上とする。